

### 3) スイトピー＝麝香豌豆／麝香連理草

スイトピーはマメ科の一年草で、日本名は『麝香豌豆』(ジャコウエンドウ)とか『麝香連理草』などといわれている。麝香と名の着く花は芳香を放つものが多く、これも例外ではない。連理草は長恨歌に出てくる「地にありては連理の枝とならんと」(01-06-04-5)というあの連理で、スイトピーが連理草といわれる由縁は、小葉が仲睦まじく互いに向き合っているためである。学名は『*Lathyrus odoratus*』で、属名はエンドウのギリシャ古名で、種小辞は香気のあるという意味である。原産地はイタリアのシシリー島で、日本に渡来したのは1862年(文久2年)のことであった。

スイトピーが世界で愛される花になったのは、1650年神父だったフランシス・クパニ(Francis Cupani)が、シシリー島で発見したことから始まる。1699年にはイギリスに送られ、この頃から品種改良が行なわれるようになった。この品種改良に大きく貢献したのはイギリス人のヘンリー・エックフォード(Henry Eckford)で、大半の品種は彼の作出したものである。このため彼のことをスイトピーの父と呼んでいる。

さてスイトピーはツルが長く、支柱に捕まりながら1~2mの高さにまで育つ。花は2~3cm程の大きめの蝶形花で、花色は原色に近いものからパステル調のものまでとりどりである。品種により冬咲き、春咲き、夏咲きがあるものの、一般的には温室で育てる冬咲きをさす。夏咲き種は最も古典的な品種で耐寒性や耐暑性も強い。欧米では改良が進み、大輪で多花性のものが作り出されている。通常10月ころ播種すると翌年の5~6月頃に花が咲く。またツル性でないリトル・スイートハートという品種は高さが30cmほどの矮性種で、マンションのテラスなどでも容易に作るができる。春咲き種は冬咲き種と夏咲き種の間にあたる品種で、4月下旬頃から咲き始める。また冬咲き種で矮性のピュー系のももよく栽培されており、これも鉢やプランターで育てるのに良い品種である。スイトピーを育てるには排水の良い肥沃な土が必要である。従って深くよく耕すことが一番で、岩盤の浅いところなどではあまり育たない。十二分に盛り土をして根が伸びるように配慮する必要がある。特に陽当たりの悪いところは花付きが悪かったり、花色に冴えがなくなったりすることも多い。また支柱が必要になるので、あらかじめフェンスの縁に播種するとか、針金や紐のようなもので工夫しておくことが大切である。

種子を蒔くのは春咲き種は10月中旬までに、夏咲き種は10月いっぱい播種する。20~30cm間隔ぐらいに植え込み、深さは3cmぐらいで一つのところに3~4個を直播きする。2週間ぐらいで発芽するが、その後は防寒をせずに冬を越させる。鉢の場合は矮性の冬咲き種を選ぶと良い。8月の下旬頃に5~6号鉢に3~5個の種子をまばらに蒔き、11月下旬から室内に取込んで育てる。早ければお正月頃に美しく香り高い花を咲かせてくれる。しかし鉢の場合は途中で肥料切れすることも多いので、腐葉土や堆肥を基肥として十分に鉢の中に入れておく必要がある。



色彩も豊富なスイトピー。普及し始めた頃はお正月の花でもあった。



スイトピーはマメ科の中では、花も大きい方になる。しかし大きさよりもこの花の魅力はチョウチョのような形をして、まるで舞うように咲き誇るところだろうか。



濃い色も淡い色もあって、花材としても人気が高い。



春を告げる花の代表でもある。



以前はカスミソウなどと組み合わせてお正月の床の間を飾る花でもあった。

[目次に戻る](#)